

# 相互交流を軸としたオンラインによる日本語短期プログラム実践報告

メタデータ	言語: 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2023-12-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山森,理恵, 二瓶,知子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/0002000218">http://hdl.handle.net/10291/0002000218</a>

# 相互交流を軸としたオンラインによる 日本語短期プログラム実践報告

山 森 理 恵  
二 瓶 知 子

## I はじめに

明治大学日本語教育センターでは、2011年度から2～3週間の日本語短期研修プログラムを夏（7月～8月）及び冬（2月～3月）に実施してきた。このプログラムは日本語学習と日本文化体験を軸とし、様々な体験学習を通して日本や日本語、日本文化への興味を深めることを狙いとしていた。また、授業や体験学習には日本人サポーターと一緒に参加し、学習者と日本人学生が共に学び合う相互交流型のプログラムである点が特徴であった。しかし2019年冬から、新型コロナウイルス感染症が世界的に流行し、来日してのプログラムは中止を余儀なくされた。そこで2020年度より、オンライン日本語短期プログラムとして新たに立ち上げることとなった。全面オンラインでの実施であることから、新しい教材の作成や時差を考慮したプログラム設計、オンライン上での相互交流活動の実現等、従来の日本語短期研修プログラムを大幅に作り替えることが必要となった。本報告では、オンラインという制約がある中で行った相互交流活動を重視したオンライン日本語短期プログラムの概要と、教材作成及び実施までの流れ、そして受講生やサポーターがどのような反応であったかを報告する。現在はコロナ禍を経て多くの教育機関でオンラインによる日本語教育が試みられているが、その報告は多

くはない。海外に居ながらにして日本語及び日本文化体験が可能となるオンライン日本語教育プログラムは今後もニーズが期待できることから、学生同士の交流を軸に日本語能力の向上と相互理解を目指した本プログラムの概要を報告することは、今後行われる日本語短期プログラムの改善に資するものとする。

## II 先行研究

近藤 (2009) では、「留学ビザを要せず3ヶ月以下の短期滞在ビザ中に完結するプログラム」を「超短期プログラム」としている。一方で日本学生支援機構が毎年度実施する「短期教育プログラムによる外国人学生受入れ状況調査結果」では、6か月未満の学位取得を目的としないプログラムを2週間未満のものも含め「短期教育プログラム」と呼んでいる。本稿では日本学生支援機構に倣い、6か月未満の留学ビザを伴わないプログラムを「短期プログラム」と呼ぶことにする。

近年、多くの大学が留学生受け入れ拡大のため、様々な短期プログラムを行っている。プログラムは、日本語の授業だけでなく、英語による日本文化や専門の授業、日本文化の体験学習を組み合わせたものも多く、中には研究室訪問や、企業訪問を組み合わせたプログラムもある (中野 2020)。また、学生サポーター (学生ボランティア) が参加するプログラムが多く見られ、プログラムを通して参加する留学生が学生サポーター (学生ボランティア) と交流することを目指すというものが見られる (秋元他 2018, 古田島他 2019)。さらに、「日本側参加者」が「共学・協働する」という位置づけで共に課題に取り組む「課題探求研修」プログラム (青木・幸松 2021)、日本人学生だけでなく在学する留学生も参加し、共に学ぶことを目指すプログラム (山森 2019) など、様々な取り組みがなされてきた。

また、新型コロナウイルスの感染が拡大した2020年以降は、オンライン

によるプログラムで、日本人学生との交流を目指す模索（栗田他 2022）も見られるようになってきた。

### Ⅲ オンライン日本語短期プログラムの概要

#### 1. プログラム実施の目的

本学の日本語短期研修プログラムは、日本の大学への留学を志す海外の学生に対し、日本語研修と国際交流の機会を提供し、明治大学のプレゼンスを高め、留学志願者の受け入れ拡大につなげることを目的として開始された。オンライン日本語短期プログラムにおいても、1) 海外での本学認知度を高め、留学志願者を獲得すること、2) 国際交流の場を創出することを目的に実施した。1) においては、特色あるプログラムの提供と、参加する受講生の日本語でのコミュニケーション能力を向上させ、日本語学習の継続を促し、留学への意識を高めることを、2) においては、明治大学学生と参加する受講生との協働的な学びの機会を通して相互理解を深めることを目指すこととした。

#### 2. プログラムの目標とデザイン

##### (1) プログラムの目標

上述の目的のもと、本プログラムでは以下の3点を目標とし、「日本語」「オフィスアワー」「文化体験」「交流会」の4つの活動を行うこととした。

＜プログラムの目標＞

- ①様々な言語活動を通して日本語によるコミュニケーション能力を向上させる
- ②自身の日本語学習を客観的にふり返り、語学学習に対する自律的態度を養う
- ③文化体験及び学生サポーター・受講生間の交流を通して様々な異文化に触れ、自文化及び他者の文化を理解・尊重する態度を養う

①については、日本語授業を、国際交流基金の JF 日本語教育スタンダード（以下、JFS）の主にやりとりのカテゴリーを参照し、課題遂行型でシラバスを組み立てることとした。②については、日本語授業において Can-do で示した自己評価シートを取り入れ、学習開始前と後に、受講生が自分自身で自身の学習を評価することとした。またオフィスアワーにおいて個別相談の時間を設けた。③については、オンラインでも実施可能な文化体験や学生サポーター主催の交流会の実施、またオフィスアワー及び日本語授業において、参加者同士の交流の時間を多く設けることとした。

## (2) プログラムの概要

プログラムの概要は表1の通りである。実施は講師確保の観点から、明治大学の学期期間外の夏（7月下旬～8月）と冬（2月～3月）の2回とし、期間はそれぞれ3週間とした。開講クラスは初級（CEFR A2 レベル）クラスと中級（CEFR B1 レベル）クラスの2レベルとし、時差を考慮して日本時間午前で開催する AM クラスと午後で開催する PM クラスを設けた。なお当該期間は、海外では学期中の大学もあることから、授業は1回あたり120分とし、オフィスアワーは自由参加（60分）とした。

表1. プログラムの概要

実施期間	夏（7月下旬～8月）及び冬（2月～3月）の3週間（18日間）
開講クラス	1回あたり計4クラスを開講 ・初級 A2 クラス（AM クラス 10:00～12:00, PM クラス 16:00～18:00） ・中級 B1 クラス（AM クラス 10:00～12:00, PM クラス 16:00～18:00）
時間数	日本語授業 18時間（120分×9回） 文化体験 6時間（120分×3回） 交流会 4時間（120分×2回） オフィスアワー 4時間（60分×4回）※自由参加
実施方法	Zoomでの同時双方向型授業 授業資料等の提供は明治大学の授業支援システム（Oh-o! Meiji）を利用
教材	自作教材

表2は全クラス共通の時間割である。回によって文化体験の実施曜日は異なるが、各科目の時間数はほぼ同様である。

表2. プログラム時間割(夏/冬, AMクラス/PMクラス共通)

1週目	月	火	水	木	金	土
	オリエンテーション 日本語①	オフィスアワー	日本語②	文化体験	日本語③	交流会
2週目	月	火	水	木	金	土
	日本語④	オフィスアワー	日本語⑤	オフィスアワー	日本語⑥	文化体験
3週目	月	火	水	木	金	土
	日本語⑦	文化体験	日本語⑧	オフィスアワー	日本語⑨	交流会 修了式

### (3) 日本語授業

日本語は1週間3回とし、各授業はCan-doの形で目標を設定した。各授業のトピックと目標記述は表3及び表4の通りである。トピック及びCan-doの目標記述は、コーディネーターが上述の通りJFSを参考に作成した。

各トピックのそれぞれの回は、自分自身の事柄からだんだんと自分の周辺や社会の事柄へと広がるようにCan-do目標を設定した。これにより学生は同じトピックについて、まず自分自身や自分の身近なことを考えることからスタートし、2回目に周辺の事柄を、そして3回目に国や社会について考えることになる。各週のトピックについても同様の意図で設定し、少しずつ話題や視野を広げていけるようにした。また各授業には明治大学の学生を学生サポーターとして複数名配置し、情報の提示や会話の相手等の役割を担ってもらった。生の一日本人の情報の提示は学習者にとってレアリアであり、また考えたことや習ったことをすぐにトライできる環境を作ることで成功体験を与え、短期間であっても自身の日本語能力の伸びを感じられるようにした。

表 3. 初級 (A2) クラス Can-do 目標記述

トピック	回	Can-do 目標記述
第 1 週 私と私の 好きな人		初めて会った人に自分の名前や出身, 学年, 趣味等について話したり, 相手に質問したりできる。
	①	日本語の勉強をはじめたきっかけや日本語の勉強の難しいところ / 楽しいところ, これからしたいことなどについて話したり, 相手に質問したりできる。
	②	自分の家族や友だちの人柄や仕事などについて写真を見せながら話したり, 相手に質問したりできる。
第 2 週 私の食生活	③	好きな有名人やキャラクターについて, 好きな理由や好きになったきっかけを簡単なことばで話したり, 相手に質問したりできる。
	④	好きな食べ物やいつもよく食べる物, 食べられない物やその理由について話したり, 相手に質問したりできる。
	⑤	どんな店によく行くか, その店は何がおいしいかについて説明したり, 相手に質問したりできる。
第 3 週 私の生活習慣	⑥	自分の国や町の有名な料理について, 写真を見せながら, どんな料理か (味, 食べ方, 似ている料理など) 説明したり, 相手に質問したりできる。
	⑦	普段の生活や休みの日の過ごし方について, 相手に質問したり, 質問に答えたりできる。
	⑧	普段よく使うアプリやソフトについて, 短い簡単なことばで説明したり, 相手に質問したりできる。
	⑨	自分の国の大切な行事について, 短い簡単なことばで説明したり, 相手に質問したりできる。

表 4. 中級 (B1) クラス Can-do 目標記述

トピック	回	Can-do 目標記述
第 1 週 私の好きな 人・物・こと		初めて会った人に自分のこと (名前, 専門, 趣味, 日本語の勉強を始めたきっかけなど) について詳しく話したり, 相手に質問したりできる。
	①	自分の好きな人や大切なものについて, その理由や魅力を詳しく話したり, 相手に質問したりできる。
	②	自分の国や町の好きな場所やおすすめの食べ物について, 好きな理由やエピソードを交えて詳しく話したり, 相手に質問したりできる。
	③	

第2週 私の生活と 社会	④	1年の自分の生活をふりかえって、変わったことや考えたことについてある程度詳しく話したり、相手に質問したりできる。
	⑤	日本語の詩を読んで、感じたことや考えたことを話すことができる。また、自分の作った詩について、どのような気持ちなのか、詳しく説明することができる。
	⑥	最近新しく生まれたビジネスや取り組みについて、どのようなものか、それについてどう思うかをある程度詳しく話したり、相手に質問したりできる。
第3週 モノの魅力	⑦	自国のおもしろい商品や便利な商品について、どんな商品か、どんな機能があるかなど、ある程度詳しく話したり、相手に質問したりできる。
	⑧	自国の商品の名前について、どのような意味か、どんな特徴があるかなど、ある程度詳しく話したり、相手に質問したりできる。
	⑨	クラスメートとディスカッションしながら、おすすめの商品に、魅力を伝えるための効果的な商品名とキャッチコピーをつけることができる。

#### (4) オフィスアワー

オフィスアワーは週1回または2回実施し、授業でわからなかったことや自身の日本語学習や留学に関する相談を個別に行えるようにした。また担当講師の他に学生サポーターが1名入り、会話練習のサポートや自由な会話を楽しんでもらう時間とした。

#### (5) 文化体験

文化体験はオンラインであっても体験が可能なもの、多くの日本語学習者が興味・関心があると思うものを中心に選んで学内外の専門家に依頼する形で実施した。現在までに実施したオンライン文化体験は、座禅体験、忍者体験、落語等である。文化体験は、初級（A2）クラスと中級（B1）クラス合同で実施したことから、依頼の際には英語（通訳含む）での説明やルビ・写真・イラストが多いPPT等の配慮を依頼した。また落語体験については明



治大学の落語研究会に依頼した。

### (6) 学生主催の交流会

参加者同士の交流を目的に、毎週土曜日に学生サポーター主催の交流会を実施した。学生サポーター及び様々な国からの受講生が日本語や日本を題材にしたクイズやゲーム、好きなテーマでのフリートーク等を通して様々な声に触れ、コミュニケーションを取りながら自由に交流できるよう、コーディネーターは内容のアドバイスをするに留め、できるだけ学生たち自身に任せようとした。

### (7) 修了証の発行

(1) で述べた通り日本語授業において、各レベルの Can-do 目標記述を並べた自己評価シートを作成し、授業の前後に受講生自身で評価することとした。自己評価シートは Google スプレッドシートで作成し、どこからでも簡単にアクセスできるように配慮した。また担当講師は授業実施後に受講生の自己評価シートにコメントやアドバイスを書き込むこととした。

プログラム終了時にはオフィスアワーを除いたクラスについて、80%以上出席した者に修了証を発行した。日本語授業に関しては、担当講師及びコーディネーターが相談のもと、目標が達成できたと判断できる受講生には修了証に当該 Can-do を記載、達成できると言えない受講生については、Can-do 記述を一部下方修正して記載した。目標 Can-do を修了証に記載することで、現在自分が日本語のできることを確認したり、必要になった際に大学や各教育機関で自分のレベルについて詳しく語れるようになることを期待した。修了証にはその他、レベルや科目ごとの出席時間数を記載した。

## 3. 教材の作成とその構成

全面オンラインとなったことから、オンライン上で配布可能な教材が必要

となった。また日本語授業は先述の通り、JFSを参照したCan-do記述でシラバスを組み立てたため、トピックに合った内容の課題遂行型の教材である必要があった。2020年11月に国際交流基金からオンラインで使用可能な課題遂行型の日本語教材『いろいろ 生活の日本語』が出されたが、日本で生活や仕事をする人を対象とした教材であることやA2レベルまでであることから、本プログラム独自の教材を作成することとした。

教材は主にコーディネーターが作成し、各授業担当者がそれぞれのクラスに合わせて修正し使用できるようにした。なおAMクラス/PMクラスでレベル差があったり、プログラム後の振り返りにおいて変更した方が良く思われたものについては、次の回のプログラム実施前にCan-do目標記述に変更を加えたため、それに合わせて教材も例文や会話例、取り上げる文法項目等を修正していった。教材は、各Can-doにより違いはあるが、大きく「表紙」→「事前課題の提示」→「インプット活動」→「アウトプット活動」という構成にした。以下中級(B1)クラスの第1週を例に教材の構成を紹介する。

### (1) 表紙

表紙には当該トピックで扱う内容の写真やイラストと共に、1週間(3回)分のCan-do目標記述を記載した。写真やイラストでトピックのイメージを膨らませ、その上でCan-do目標記述を確認し、1週間の授業を通して日本語で何ができるようになるかを確認できるようにした。

### (2) 事前課題

次ページには授業までに考えてくる内容を記載した。中級(B1)クラスの「日本語②」では、Can-do目標記述が「自分の好きな人や大切なものについて、その理由や魅力を詳しく話したり、相手に質問したりできる」であるため、まず自分の好きな人や大切なものは何かを考え、その理由ときっかけ及びその魅力を母国語でメモしてくることを事前課題とした。また授業で

扱う語彙や知っておくと便利な表現を一覧で提示し、事前に確認しておけるようにした。

### (3) インプット活動

インプット活動は、「聞きましょう」→「ことばや表現を確認しましょう(内容の確認, ことばと文法の確認)」→「メモを見て話しましょう」という構成にした。「聞きましょう」では、実際に学生サポーターと担当講師が会話をし、生の会話を聞くことを体験できるようにした。「ことばや表現を確認しましょう」では、まず会話の全体の内容を確認し、その後、Can-do 達成に必要なことばや文法を取り上げ、トピックと関連のある例文で練習するようにした。本プログラムに参加する学生は、学習してきた日本語教材や背景が違うため知識に差がある。文脈を広げずに Can-do 達成に必要なものみに焦点を当てることで、短い時間の中でも、受講生同士で話し合ったり教え合ったりできるようにした。「メモを見て話しましょう」は、会話の一部分のキーワードを頼りに内容を再生する練習である。海外にいる学習者は日本語で話す機会が限られているため、話すことが苦手な受講生も多い。再生練習は、そういった受講生にとってよりスムーズに次のアウトプット活動へとつなげていく橋渡しとなる。

### (4) アウトプット活動

アウトプット活動は、「話す前にまとめましょう」→「メモを見て話しましょう」→「ペアまたはグループで話しましょう」→「書きましょう」から成る構成にした。まず「話す前にまとめましょう」では、(2) 事前課題で考えたことを確認し、それを日本語ではどのような流れでどのように話したらいいか、インプットで新たに学んだことを参考にメモを作る。次に「メモを見て話しましょう」では、そのメモを見ながら話を組み立てる練習を行い、「ペアまたはグループで話しましょう」でブレイクアウトルームに分かれ、実際に会話を行う。ブレイクアウト後には、印象に残ったことを話し合う活動を入れ、自分が話すことだけに注力するのではなく、クラスメートの話を

しっかり聞くことを促すようにした。最後に「書きましょう」では、話した内容をまとめて授業支援システム上のクラスの掲示板に投稿する活動を取り入れた。実際に文字に書くことで学んだ内容や項目を整理したり、話しことばと書きことばを意識したり、自身の日本語やクラスメートが話した内容を改めて確認することができる。掲示板では、書き込まれた内容にコメントを書くことも指示した。

#### IV プログラムの実施

以上のデザインのもと、2020年度～2022年度までに計4回のオンライン日本語短期プログラムを実施した。以下、実施までの流れと受講生の概要を記す。

プログラムの実施については、学内での承認後、左記の流れで進められた。

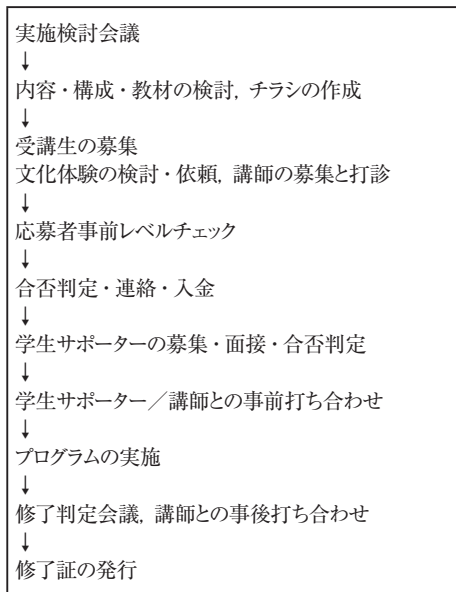


図 1. 実施までの流れ

受講生の募集については、まず明治大学の協定校の中で日本語の授業が行われている大学に周知した。その後、募集の状況を確認しつつ、協定校のみならず広く一般に募集を行った。目標内容に鑑み、1クラス8名程度とした。延べ4回の参加者数と参加国は表5の通りである。

時期によって受講生が集まらないこともあった。またレベルチェック未受験や

表 5. 各回の受講者数

	初級 (A2) AM クラス	初級 (A2) PM クラス	中級 (B1) AM クラス	中級 (B1) PM クラス	計
2020 年度 (冬期)	8 名	4 名	10 名	10 名	32 名
	韓国 5, カナダ・メキシコ各 4, オーストラリア・米国各 3, スペイン・中国・フィリピン・マレーシア各 2, インドネシア・エルサルバドル・セルビア・ブラジル・ロシア各 1				
2021 年度 (夏期)	8 名	9 名	8 名	11 名	36 名
	中国 7, フランス 6, フィリピン 4, 英国・米国各 3, 香港・ スロバキア各 2, オーストラリア・スペイン・ロシア・カナダ・ インドネシア・ギリシャ・ポーランド・イタリア・ドイツ各 1				
2021 年度 (冬期)	7 名	10 名	10 名	11 名	38 名
	中国・オーストラリア各 7, 韓国 6, ドイツ 3, 英国・米国各 2, 香港・台湾・インドネシア・ジャマイカ・カナダ・ポーランド・ イタリア・カザフスタン・ロシア・アルメニア・ルーマニア各 1				
2022 年度 (夏期)	10 名	11 名	8 名	9 名	38 名
	中国 8, 英国・ドイツ各 4, インドネシア 3, イタリア 2, オーストラリア・ロシア・韓国・台湾・米国・香港各 2, ブラジル・ハンガリー・カナダ・マルタ・インド各 1				

参加費の入金がない場合に随時追加募集を行ったため、受講者数には波があった。また学生サポーターの募集に関しては、できるだけ受講生と密に接してもらうため、各クラス 4, 5 名と少人数とした。

## V 受講生・サポーターの反応 (2022 年 (夏期) プログラム)

### 1. プログラムに対する満足度

先述のような目的、方法でプログラムを行った結果、参加した受講生、サポーターにどのような反応が見られたか、2022 年 (夏期) 開催のプログラムに参加した受講生<sup>注1)</sup>の日本語授業に対する自己評価及び、受講生・学生サポーター<sup>注2)</sup>の終了後アンケートをもとに見ていきたい (引用は全て原文ママ)。

2022年（夏期）プログラム終了後に行った受講生に対するアンケートで、プログラムに対する満足度を訪ねたところ、両クラスとも「非常に満足」「満足」を合わせると回答の90%前後を占めた（図2、図3）。アンケートに[1][2]のようなコメントもあり、受講生にとって相対的に満足度の高いプログラムであったことがわかる。

[1] It was better than I expected! Speaking Japanese the whole time was very good practice. (受講生 k [初級])

[2] Overall, I am immensely satisfied with this course. Every week was equal parts fun and challenging, which led to an ideal classroom environment. (受講生 o [初級])

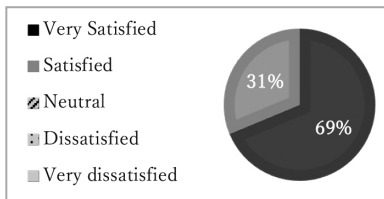


図2. 初級クラス受講生のプログラムの満足度

(「Q: Please rate your satisfaction of this course.」という選択式の問いへの回答)

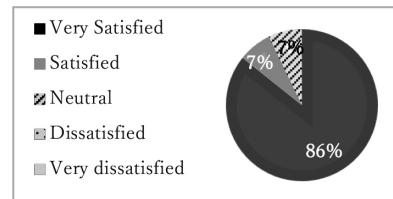


図3. 中級クラス受講生のプログラムの満足度

(「Q: Please rate your satisfaction of this course.」という選択式の問いへの回答)

## 2. 日本語でのコミュニケーション能力の向上

本プログラムでは、短い期間においても様々な言語活動を通して日本語によるコミュニケーション能力を向上させることを目指したが、プログラムに参加して日本語力が伸びたと感じるかというアンケートの問いに対して、「非常に伸びた」「伸びた」を合わせると回答の90%前後を占めた（図4、図5）。特にどのようなスキルが伸びたと感じるかという問いに対しては、「話すスキル」が伸びたという回答が初級クラスで81.2%、中級クラスで85.7%

と非常に多く、プログラムの様々な活動を通して、コミュニケーション能力に大きく関わる「話すスキル」が伸びたと実感していることがわかった。

アンケートでも話す力が向上した [3], 最初は思うように伝えられなかったが、より上手に伝えられるようになった [4] というコメントがあった。

[3] My speaking ability got better (受講生 H [中級])

[4] I think my capability of talking in Japanese has become much much better. At first i was unable to communicate the way i wanted, but then i started to become more and more skilled (受講生 j [初級])

また、サポーターとの交流を通して、日本語でのコミュニケーションに自信を得たというコメントも見られた [5]。

[5] Supporters are very helpful during the class. Not only provided help throughout the first half of the class, but also built up our confidence to communicate while in the breakout room. Very appreciated. (受講生 I [中級])

さらに、学生サポーターと交流することが大きな動機となり、今後のコミュニケーション能力の成長が期待できるコメントもあった [6]。

[6] I realized that what motivates me the most is the interactions

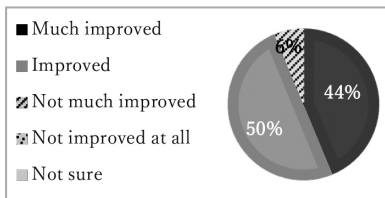


図 4. 初級クラス受講生の日本語力の向上  
(「Q: Do you think your Japanese skills have improved through participating in this course?」という選択式の問いへの回答)

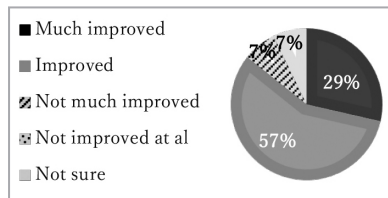


図 5. 中級クラス受講生の日本語力の向上  
(「Q: Do you think your Japanese skills have improved through participating in this course?」という選択式の問いへの回答)

that I can have with Japanese students around my age (student supporters, Rakugo students), because I want to be able to communicate effectively with them in the future. (受講生 E [中級])

### 3. 語学学習に対する自律的態度

本プログラムでは、自身の日本語学習を客観的にふり返り、語学学習に対する自律的態度を養うことも目指した。受講生は Can-do で示した自己評価シートに、自らの授業でのパフォーマンスについて、どういったことができ、どういったことが十分できなかったか、客観的に見てふり返りを書いている [7] [8] [9]。このように自身の日本語力について客観的に見ることができれば、今後自律的に学習を進めていくことが期待できると言えよう。

[7] 料理に関する言葉をたくさん学べました。でも、覚えるのがちょっと難しです、もと話の練習をします。(受講生 b [初級])

[8] たくさんの動詞を勉強しました。料理について説明するのは大丈夫です。他のクラスメートに質問するのも ok です。でも、料理の作り方を説明するのは難しいです。(受講生 c [初級])

[9] 二つの主題で全部話しましたが、好きな人についてはうまくできませんでした。曲が好きな理由の説明が難しかったです。(受講生 K [中級])

### 4. 自文化及び他者の文化を理解・尊重する態度

本プログラムではもう一つの目標として、文化体験及び参加者同士の交流を通して様々な異文化に触れ、自文化及び他者の文化を理解・尊重する態度を養うということを目指した。アンケートには、学生サポーターやクラスメートとの交流を通して、日本に暮らす若者の経験について知ることができた [10]、実際の日本文化の理解が進んだ [11]、日本だけでなくクラスメートの国の文化を知った [12] といった記述が見られた。



[10] it was very informational and enjoyable to learn about the experiences of students around my age who are living in Japan. We had a lot of fun about each other. (受講生 g [初級])

[11] I learnt a lot more about Japanese culture. There were a lot of things that I did not know before, such as the many omatsuri, different kinds of kimono to be worn on different occasions, and many more. I always knew Japan from anime, but now I realised that the real world is so much different from the animation world. (受講生 c [初級])

[12] 日本語と日本文化だけじゃあなく、クラスメイトのみなさんの国の文化も少しでも見られて、私にとって本当に世界が広がれると思います。(受講生 G [中級])

このように交流によって相互理解が進むことが他者や他者の文化を尊重する態度を育む第一歩になる。このような経験の積み重ねによって、自らや異なる他者の考え方や文化を尊重する態度が養われていくことが期待できると言えよう。

## 5. 成長につながる刺激

さらに、アンケートから、プログラムを通して受講生が今後の成長につながる大きな刺激を受けたことがわかった。

[13] 中国, スイス, ロシア, ドイツ, オーストラリアの人と話せるようになってうれしかったです。様々な国で日本語を勉強しているこの事実が私も頑張ろうとおもわせるになりました。(受講生 K [中級])

[14] I learnt more vocabularies that are more commonly used in daily conversations in a polite manner, and seeing how fluent everyone speaks makes me want to work harder (受講生 D [中

級])

プログラム自体は短期間であるが、このような意欲を持つことで、今後の大きな成長につながる事が期待できる。

## 6. サポーターの成長

受講生の成長を目指したプログラムであったが、参加した学生サポーターの満足度も非常に高かった。アンケートではほとんどの学生が参加したことを「非常に満足」と回答している(図6)。また、学生サポーターにとっても大きな成長の機会となったようであ

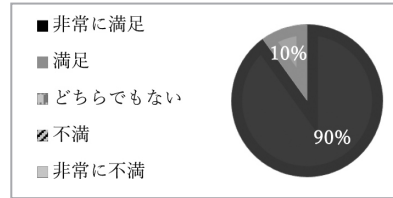


図6. 学生サポーターの参加満足度  
(「Q: このプログラムにサポーターとして参加したことの満足度を教えてください。」という選択式の問いへの回答)

る。異文化を知ることができた [15], 新たな日本の一面を発見した [16], 私も頑張ろうと思った [17], 協力し合う機会となった [18] といった記述が見られた。

[15] 授業に関係ない話題について話して、異文化を知ることができて良かったです。(学生サポーター④)

[16] 授業のサポートをしてみて日本人から見た日本と留学生のみなさんから見た日本の違いに気づかされました。留学生のみなさんと話す中で、自分とは違った視点に立って日本を見ることで自分では気づかなかった新たな日本の一面を発見することができました。(学生サポーター⑩)

[17] 自分と同じ学生の方が毎日の授業と並行して日本語の学習を頑張っている姿を見て、私も勉強を頑張ろうと思いました。(学生サポーター⑤)

[18] サポーターとこんなに協力するとは思わなかったです。(学生サ

ポーター②)

このように、サポーターにとっても、新たな視点を獲得し、刺激を受け、協働を体験する貴重な成長の機会となったようである。

## VI まとめ

本稿では、オンラインという制約がある中でも相互交流活動を重視しながら実施したオンライン日本語短期プログラムの概要と、教材作成及び実施までの流れ、それにより受講生やサポーターはどのような反応であったかを報告した。短い時間でも日本語能力を伸ばすこと、自らの日本語力を客観的に見ること、日本語による交流で成功体験をつかんでもらうこと、様々な国の学生との交流で相互理解が進むことを目指した結果、2022年度(夏期)に参加した受講生のアンケート及び日本語授業に対する自己評価から、オンラインプログラムが、日本語によるコミュニケーション能力の向上、語学学習に対する自律的態度及び自文化及び他者の文化を理解・尊重する態度の育成、成長への刺激となり、また、学生サポーターにとっても、視野を広げ、刺激を受ける貴重な機会となったことが明らかになった。

今後、対面プログラムのデザインを考えていくうえでも、今後も一つの選択肢として残るであろうオンラインプログラムについて考えていくうえでも、本稿で明らかになったことをもとにさらに検討し、よりよい短期プログラムの構築を目指していくべきであると言えよう。

注1) 2022年度夏期プログラムの受講者数は、初級クラスは21名、中級クラスは17名であったが、うち、研究協力の同意が得られた初級クラス16名(イギリス・中国各3、ドイツ2、米国・イタリア・インド・インドネシア・オーストラリア・ハンガリー・ブラジル・ロシア各1)を「受講生 a-p [初級]」とし、中級クラス14名(中国5、インドネシア・韓国各2、オーストラリア・カナダ・台湾・マルタ・ロシア各1)を「受講生 A-L [中級]」として自己評

価及び終了後アンケートを分析した。

注2) 学生サポーターは全10名で、全員から研究協力の同意が得られ、「学生サポーター①-⑩」として分析対象とした。

## 参考文献

- 1) 青木俊介・幸松英恵 (2021) 「『課題発見・解決力』の養成を軸とする新たな短期日本語研修プログラムの試み—学習院大学グローバル・キャンパス・アジア東京「課題探究研修」をモデルとして—」『学習院大学国際センター研究年報』7, 59-78.
- 2) 秋元美晴・島崎英香・井口祐子・古田島聡美・武田知子 (2020) 「交流型日本語短期プログラムにおける学習者の日本語発話力の変容：2018年度恵泉女学園大学サマープログラムから」『恵泉女学園大学紀要』32, 17-45.
- 3) 栗田奈美・志賀里美・小野里恵・上原真知子・島崎英香 (2022) 「オンラインによる交流型日本語短期プログラムの試行：ICTを活用した協働学習の有効性」『恵泉女学園大学紀要』33, 103-120.
- 4) 近藤佐知彦 (2009) 「21世紀型『超短期』受入プログラム開発：30万人時代の受入構築に向けて」『多文化社会と留学生交流：大阪大学留学生センター研究論集』13, 45-55.
- 5) 独立行政法人国際交流基金 (2017) 『JF日本語教育スタンダード【新版】利用者のためのガイドブック』独立行政法人国際交流基金.
- 6) 独立行政法人国際交流基金日本語国際センター (2020) 『いろいろ 生活の日本語』 < <https://www.irodori.jp/index.html> > (2023年9月1日).
- 7) 中野遼子 (2020) 「日本の大学における超短期受け入れプログラムの比較考察」『多文化社会と留学生交流：大阪大学留学生センター研究論集』24, 35-41.
- 8) 日本学生支援機構 (2021) 「2021 (令和3) 年度短期教育プログラムによる外国人学生受入れ状況調査結果」 < [https://www.studyinJapan.go.jp/ja/\\_mt/2023/02/date2021p.pdf](https://www.studyinJapan.go.jp/ja/_mt/2023/02/date2021p.pdf) > (2023年7月6日).
- 9) 古田島聡美・武田知子・島崎英香・井口祐子 (2019) 「交流型短期プログラムにおける学習者の日本語発話力の変化」『日本語教育方法研究会誌』26-1, 66-67.
- 10) 山森理恵 (2019) 「日本人学部生・在学留学生と共に学ぶ短期プログラム：2017年度ヨウツェノ学院短期プログラムの報告」『東海大学紀要・国際教育センター (留学生支援教育部門・国際教育部門)』9, 159-167.

(やまもり・みちえ 国際連携機構特任准教授)

(にへい・ともこ 文学部兼任講師)